

口頭発表 | 口頭発表

2023年5月27日(土) 9:00 ~ 9:45 | M会場 (14号館146A)

住居

座長：葉袋 奈美子 (日本女子大学)

9:00 ~ 9:15

[2M-01] 卒業後の住まいを選択する際の賃貸マンションへのニーズ分析

大学生4年生を対象とした調査から

○大谷 由紀子¹ (1. 摂南大学)

9:15 ~ 9:30

[2M-02] 大学生の生活行動と防犯対策との関連

○中迫 由実¹ (1. 熊本大)

9:30 ~ 9:45

[2M-03] 子どもを対象とした洪水の経験を伝承する防災ワークショップ

○田中 麻里¹ (1. 群馬大)

口頭発表 | 口頭発表

2023年5月27日(土) 9:00 ~ 9:45 | M会場 (14号館146A)

住居

座長：葉袋 奈美子 (日本女子大学)

9:00 ~ 9:15

**[2M-01] 卒業後の住まいを選択する際の賃貸マンションへのニーズ分析
大学生4年生を対象とした調査から**○大谷 由紀子¹ (1. 摂南大学)

キーワード：賃貸住宅、若者、ワンルームマンション

「目的」大学卒業後、経済的に独立した若者が住む住宅として、ワンルームマンションは都市部の典型的な住まいである。一方で、在宅ワークが普及し、共用部にワークスペースやカフェスペースなどを設けた新しい賃貸マンションが登場している。本研究は、在学中の多くの時間をオンラインで過ごした若者が就職して初めて住む住宅として、賃貸マンションにどのようなニーズがあるのかを把握する。

「方法」事前調査として、賃貸マンションを扱う不動産営業マンに、顧客である若者のニーズを聞き取った。次いで、大学4年生30名にアンケートとインタビューを行った。調査内容は、卒業後に大阪市内の賃貸マンションに住むと想定し、立地や住戸の方角等の条件を一定にした上で、間取り、性能、設備に対する要望、私物の量などを把握した。

「結果」①不動産マンへのインタビューから、住宅選択時にランニングコストの節約、立地、水廻りの設備を重視している、②アンケートとインタビューからは、インターネット無料、コンロ、オートロック、クローゼット、24時間ゴミ出可が標準装備である、③家賃の上昇に伴い、間取りや広さよりも、室内洗濯機置場、カメラ付きインターホン、浴室乾燥機、3点セパレート、3コンロなど水廻りを主に設備の充実を優先している、④私物の量によって収納へのニーズが高い、⑤共用のワークルームには一定の関心はあるものの住戸内の充実を優先する、以上が把握できた。

口頭発表 | 口頭発表

2023年5月27日(土) 9:00 ~ 9:45 | M会場 (14号館146A)

住居

座長：葉袋 奈美子 (日本女子大学)

9:15 ~ 9:30

[2M-02] 大学生の生活行動と防犯対策との関連

○中迫 由実¹ (1. 熊本大)

キーワード：防犯、大学生、ライフスタイル

【目的】大学生の多くは20代で、犯罪の被害にも遭遇しやすい年代である。これらの世代への防犯対策の促進に向けた取組みは十分とはいえない。そこで本研究では、大学生の生活行動や防犯意識を把握し、防犯行動を促すための要因を明らかにする。

【方法】協力の得られたK大学学生101名にGoogleフォームを利用したアンケート調査を行った。調査期間は2022年11月30日～2022年12月27日である。調査項目は「1.属性」「2.犯罪不安について」「3.生活行動について」「4.繁華街の利用状況について」「5.インターネットの利用状況について」「6.防犯対策について」の計6項目から構成されている。

【結果】学生の生活行動や意識として、夜間22時以降の帰宅頻度、繁華街へのアクセス頻度、男女宿泊への抵抗感、住まいの環境、夜間の飲み会の頻度、住宅の防犯設備の有無と防犯対策の実施状況および犯罪不安感について分析を行った。夜間22時以降の帰宅頻度が高い人は防犯対策をあまり実施しておらず、また帰宅時に不安があるとの結果がえられた。繁華街へのアクセス頻度と防犯対策の実施数には顕著な相関は見られなかった。防犯カメラやオートロックシステムが設置されている住宅に居住している人は、犯罪への不安感が高い傾向がみられた。本研究は、科学研究費19K02877により実施した。

口頭発表 | 口頭発表

2023年5月27日(土) 9:00 ~ 9:45 | M会場 (14号館146A)

住居

座長：葉袋 奈美子 (日本女子大学)

9:30 ~ 9:45

[2M-03] 子どもを対象とした洪水の経験を伝承する防災ワークショップ○田中 麻里¹ (1. 群馬大)

キーワード：住環境、洪水、経験共有、郷土かるたトランプ、防災教育

目的 防災教育においては、災害の危険性に注目するだけではなく、自然の恩恵を享受しながら、自分が住む地域への愛着や誇りを持ち、災害時には主体的に避難できるようにすることが大切である。学習指導要領においても過去に起こった災害を扱うことが明記されており、身近な地域の災害について知り、自分ごととして捉えることが重要である。本研究では、洪水に対応してきた暮らしについて理解を深め、自ら伝えたいと思う地域の良さや先人の洪水対応について紹介するカードを制作するワークショップを企画実施し、その効果を検証することを目的とする。

方法 群馬県板倉町において、板倉町と洪水時の生活の工夫について紹介した後、実際に洪水時に避難場所となる水塚の見学を行いながら生活の工夫について居住者から話を聞き、あらかじめ洪水を想定した地域の暮らしを紹介するかるたカードの制作を行った。参加者に感想シートに記入してもらい分析を行った。

結果 板倉町では洪水に備えて各家で揚舟を用意し、水塚を建設するなど対応を行ってきており、町内には多く残っているが、子どもたちの認知度は低かった。WSに参加した子どもたちは、初めて実物を見る機会を得て、さまざまなことに気づき、実感を持って理解していた。また、町のことをたくさん知れてよかったという意見も見られ、自分の住む地域へ関心を向けることについても一定の効果が見られた。